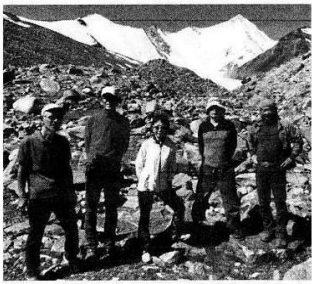


日本山岳会東海支部設立60周年記念登山

インドヒマラヤ登山隊未踏峰にチャレンジ

東海支部は、昨年設立60周年の記念となる海外登山2隊の遠征を行い、いずれも登頂を果たして無事帰国した。後援をいただいた第14次インドヒマラヤ隊は、1988年より継続して行っている中高年登山隊で、インドヒマラヤ・ヤン峰(6230m)に派遣して以来、14次、18隊をインドヒマラヤの6000m峰に派遣し、全て目的の山に登頂し、内10座は初登頂です。登山のスタイルは、未踏地域の踏査、学術調査、環境調査等



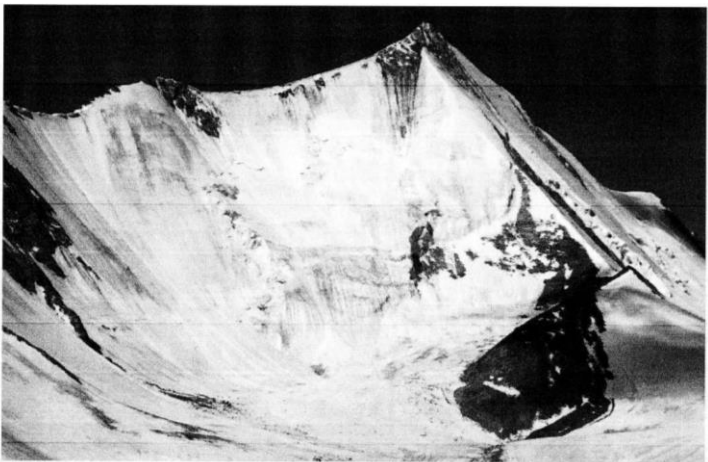
であり、支部設立の志向を継続しています。第14次隊は、当初、旧ジャム・カシミール州のパンゴン山脈地区に位置するパンゴン・レンジの未踏峰に狙いを定めました。しかし2018年の13次隊未踏峰登山後は、コロナ禍の影響により偵察等の海外渡航ができず、延期せざるを得ない状況が続きました。また、インド・IMFは今年3月に申請書を受理しながら、登山許可は6月訪問時でも許可を受け取ることは叶わず、第3候補地のラダック州カン・ユーセイ山群に変更して申請し、ようやく受理された。(期) 2022年6月20日名古屋 羽田ANAでテリィ着 帰路は7月21日 28日羽田 名古屋帰着 (隊の編成) 総隊長 沖 允人 (87歳) 隊長 長 一男 (71歳) 登攀隊長 栗木洋明 (68歳) 副 〃 岩瀬幹生 (67歳)

隊員 印藤寿浩 (63歳) 印藤義子 (63歳) 鍛次真由美 (50歳) ガジェンドラ・デシムムク (45歳)

〔概要〕

6月21日 登山隊はテリィに到着し、IMFを訪問、代表ブイジャイ・シンと会議を開き、登山許可の最後の要請をおこなったが、第一目標のラダック州・パンゴン山脈・メラック峰(6481m)と第二目標としていたラダック山脈のラルギャップ(6150m)はいずれもインド政府からの許可が取得できなかった。第三目標としていたラダック山脈のカン・ユウセイIII(6401m)と周辺の無名峰に登山許可を申請し、急遽登山許可書を発行してもらった。

6月23日 空路ラダック州の首都レー(3505m)に移動し、数日滞在し、登山準備と高所順応を行った。6月28日 中型車5台とトラック1台でレーを出発し、約50km先のカルー(3800m)の少し先から南の谷に沿ったキャラバンコースに入り車道の終点ジャン・スムドに到着した。事前に手配して待機していた24頭の馬に隊荷を積み、谷にそって出発した。キャラバン、車道の終点からベースキャンプまで河原の中の道を進み、3時間で河原か



シャドール・リ (5942m) PHOTO 日本山岳会東海支部登山隊

ら離れて山の斜面を登り、2時間で中継点のキャンプ地に到着した。

6月29日 中継点のキャンプ地を徒歩で出発し、3時間でコンマル峠(5260m)に到着した。コンマル峠からは、カン・ユウセイ山群の全容が望まれた。そこから南に細い道をくだり、約3時間でニマリン谷に降り立ち、約2時間ほど花場の咲き乱れる草原を移動して5000m地点に到着してキャンプした。隊荷は24頭の馬で運んだ。キャンプ地は広々とした草原で川も流れていた気持ちの休まる場所であった。

〔登山活動開始〕

6月30日 キャンプ地を出発し、カン・ユウセイ山群の南側下部にBC(約5278m)を設営した。

7月2日 カボ・リ(6150m)の上部ルート偵察のため、2隊を編成した。氷河チームは、カボ・リ氷河を詰めて、カボ・リ(6150m)の西にのびたコル(山頂から500mほど西にある)まで偵察に行った。ルートは、瘦せたポロポロの岩で危険が多く、登頂ルートとしては、採用できないと判断した。栗木(登攀隊長)、岩瀬(登攀副隊長)、鍛次隊長を含めて「稜線グループ」6名は、BCよりカボ・リ、からシャドール・リに続く東陵上(5600m)付近まで偵察した。稜

線の北側は急峻な雪と氷の壁で、南側はガレの急斜面である。稜線上に進むキャンプを設営すれば登頂は可能と判断し、その後、BCに帰着した。

7月3日 体調不良の印藤寿浩に同行して印藤義子と星一男隊長が馬と車を乗り継ぎ、急遽、レーに下山した。その後の登山指揮は登攀隊長の栗木洋明が行った。

7月4日 午前7時50分、日本人3名とインド人5名がBCを出発。日本人3名とインド人5名がHC設営地点に9時55分に到着した。この時点で雨柱が接近してくるのを確認。その後、風雨が強まりテントの中で一時間ほど待機し、この日の上部偵察は諦めた。その後、荷揚げ要員のインド人2名がBCに下山。テント2張りを設営し、5600mに日本人3名とインド人2名が宿泊した。

7月5日 前夜から天候が思わしくなく、登頂が危ぶまれたが朝までには天候が回復。HCを6時30分に出発。5名が安全のためにアンザイレンドール・リ(5942m)に登頂した。45分間頂上について写真撮影などを行った。ガボリ山頂に続く稜線は急峻で、これをたどることは危険が多いと判断し11時20分にHCに帰り、テントを撤収し12時10分に下山開始。13時にBCに帰着した。

7月6日・7日 BCで休養。

7月8日 BCは移動はせず、これまでのBCからドゾ・ジョンゴ(6211m)東峰に登ることにし、日本人3名とインド人4名が8時45分に出発。12時10分、ドゾ・ジョンゴ東峰の東尾根上にHC(5805m)を設営した。この日、午後から風速が強まり天候が悪化。午後2時半ごろから3時40分ごろにかけて雷雲が頭上を通過。それと同時に霰が強烈な勢いでテントに吹き付け、生きた心地がしなかった。夜間には雪が降り積もり、翌朝にはあたり一面銀世界になっていた。

7月9日 明け方まで雪が降り続けていた。天候の回復を1時間ほど待ってHCを7時05分に出発し、ドゾ・ジョンゴ東峰に9時25分に登頂し10時40分まで山頂に滞在し

た。周辺の山々を間近にながめ、下山を開始した。11時40分にHCに帰り、テントを撤収し、HCを12時40分に出発、14時10分に無事、BCに帰着した。

7月11日 BCを撤収して8時10分に出発。来るときと同じキャラバンコースで16時40分に車の終点ジャン・スムドに到着。迎えの車でレーに向かい、19時にラリーモーターに到着した。

〔総括〕

インド辺境地帯の4000mを超す過酷な自然環境での高齢者を中心にした登山隊であったが、力を合わせ一応の目的を達成した。

ご後援頂いた「中日新聞社」並びに「愛知県山岳連盟」をはじめ多くの皆様のご支援・ご協力いただいた関係各位に心からお礼申し上げます。(沖 允人・星 一男)



カン・ユウセイ山群